

# 第1章 なぜ、まずリスニングなのか

## 「聞くこと」の深み

### 「四技能」という区別を疑ってみよう

「はじめに」でも触れたように、「四技能」という用語がこの数年、頻繁に使われるようになりました。英語学習を文法事項の確認や読解練習だけで終わらせてはいけない、もっとバランスよくやろうということで、「読む」「書く」「話す」「聞く」の満遍ない習得が目標に掲げられるようになったのです。

こうした試みには一定の効果があると私は思います。これまでバランスが悪かったのなら、その是正にもつながるでしょう。しかし、限界もあります。それは一つには、こうした「万遍のない習得」が中等教育（中学・高校）の段階で可能なのが疑わしいからです。基礎知識の習得でも手一杯なのに、「読む」「書く」「話す」「聞く」を全部やるという目標をかかげても無理なのではないか、中途半端になるだけではないか、肝心の基礎力が落ちるだけではないか、ということです。

二つ目の疑念としては、「四つ均等」にこだわるのがほんとうに合理的なのか、ということがあります。子どもの発達状況に応じて適切な順番を考慮するほうが合理的なのではないか、そのほうがスムーズに英語力が身につくのではないか、ということ。日本語の「読む」「書く」「聞く」「話す」を考えてみても、四つの技能なるものがはじめから同じくらい身についている人がどれだけいるでしょう。むしろ偏りがあるのがふつう。発達段階によって言葉との付き合い方は異なるのです。とりわけ文章を書く力となると、かなり年齢が上になってもまだまだ発達途上となりがちです。これは日本語でも英語でも同じで

しょう。

最後の三つ目の疑念は、より根本的なものです。そもそも言語活動をきれいに四つの分野にわけることなどできるのか、ということです。たとえば「話す」とは頭の中で英作文を書くようなものだ、という人がいます。そうした見方をとるなら、書くことと話すことを区別することに大きな意味はない。頭の使い方がかなり重なるのだから、両者を組み合わせた学習のほうが効果的でしょう。

「読む」と「聞く」ことも重なる。文章を読んでいるときに言葉の音が聞こえてくるようだと感じる人もいます。それ以外にも、たとえば日本語での体験を考えても、読んだ文章からキーワードを拾いながら発言するということはよくあるでしょう。四つの技能はこのように区別しがたいほどからみあっています。杓子定規に「四」の区分にこだわっても意味がないどころか、むしろ学習のさまたげにさえなります。

#### 「聞く」VS「読む」「書く」「話す」

四技能という区分は新しいものではありません。これまでも「読む」「書く」「話す」「聞く」という区分は使われてきた。当たり前のように、それでさほど問題が生じなかったのは、これが便宜的な分け方にすぎないという了解をみなぎ共有していたからです。今、その区分けが独り歩きして「四技能を均等にやらねばならぬ」と言われ始めた。その結果、いろいろとおかしなことが生じてきました。たとえば語彙やフレーズはどの「技能」に区分するのか。当然、どれにも入ります。たとえば文法は？ 構文の知識は？ こう考えると、中等教育では四技能などという区別に過度にこだわる前にやらなければならないことがたくさんあることがはっきりしてきます。

今私たちがすべきなのは、この「四」という区分を疑うことです。果たして「読む」「書く」「話す」「聞く」はほんとうに同等に見なすことができるのでしょうか。むしろ、それぞれの違いを見極め、どの段階で、どれを、どんなふうに取り入れるべきかを検討する必要があるのではないか。

そこで注目したいのが「聞く」ことの特異性なのです。たとえば「読む」「書く」「話す」は圧倒的に「する」ことです。うまくいくどうかは別として、この三つはある程度自分で「よし、やるぞ」と意識的にコントロールして行うことができる。意志の力によって、始めたり終わったりすることができる。そういう意味では「読む」「書く」「話す」は「行為らしさ」が強いのです。これらに取り組んでいるとき、私たちはより主体らしく振る舞っているように感じられます。

これに対し「聞く」はちょっと違います。「耳にはいつてくる」という言い方からもわかるように、「聞く」はコントロールが難しいのです。耳はスイッチオンやオフが簡単ではない。聞きたくないときも、文字通りに耳をふさぐことはできない。耳栓をしたり、その場から立ち退いたりという物理的な手段に訴えるしかないのです。

自分から能動的に「聞こう」とするときにも、できることは限られています。「聞く」はもともと受動性が強いので、「えい！」と集中して聞こうとしても、いつの間にか聞くのをやめてしまっていたり、あるいは聞くつもりのない他のことに耳がいつてしまったりする。なかなか思い通りにいかない。

これは困った。どうしたらいいのか。どうしたらうまく聞けるのか。この本ではそのことを考えたいと思っているわけです。

## 「聞く」の深み

しかし、「聞く」こととしての限界や難しさに着目すると、その奥深さも見えてきます。ドイツの哲学者マルチン・ハイデガーの有名な用語の一つに *thrown-ness* (ドイツ語の原文では *Geworfenheit*) というものがあります。過去は現在に先立っており、人間にはもはや変えられないものであって、私たちの「今」は先行する過去の縛りに「投げ込まれている」状態だということです。この *thrown-ness* という受け身形には、人間の根源的な受動性が示唆されています。

「聞く」ことは、この「投げ込まれている」状態を思い出させます。私たちは他者の言葉をコントロールすることはできない。だから、「聞く」とはつねに先行する他者の行為を**追いかける**ということなのです。「聞く」とき、私たちはやや遅れて、他者の言葉に追いついているにすぎない。そこからは賛意や共感が生まれることもあれば、反発や嫌悪につながることもある。引用したり批評したりもしたくなる。私たちが「意見を述べる」「自分の考えを言う」と言うとき、その出発点はほぼ必ず「聞く」ことにあるのです。「聞く」という受け身の行為が、「意見」や「考え」を生み出している。

とはいえ、私たちがいつも受け身で遅れているわけではありません。たとえば私たちは他者の言葉を予測し、**待ち伏せることができる**。そうすることで、ある程度主体的に、他者の言葉に対応することは可能である。また、そもそも他者の言葉は、それに先立つ私たち自身の言葉への反応であり追従であるのかもしれない。ということは、私たちは自分の発する言葉を通して、他者の言葉に影響を与え、場合によってはコントロールすることもできる。

こうみえてくると、「聞く」ことに限らず「話す」ことや「書く」ことも含め、言葉の運用というものが、かなり入り組んだ依存関係の網の目の中にあることがわかってきます。相手を追いかけるばかりだと思っていた行為が、実は自分の行為に発している。ところが、そんな自分の行為も、翻って、相手に対する追いかけてを発端にしているのかもしれない。すごくややこしい。この目がまわるような入り組んだ錯綜性こそが言葉の実態だとするなら、いったいどうすればいいのでしょうか。

しかし、私たちは案外上手に言葉を使いこなしています。書いたりしゃべったりがうまくいかなくて悩み苦しむことももちろんあるけれど、大きくみれば、少なくとも母語でそれほど四苦八苦している人はあまりいないでしょう。ほとんどの場合、言葉を使っているということを意識することなく、苦もなくしゃべったり聞いたり、読んだり書いたりしている。いったいなぜ、私たちは言葉を**使えちゃう**のでしょうか。

私たちのこの不思議な対応力を理解するには、言葉を上手に使うとはどうい

うことか、あらためて考えてみる必要があります。先に確認したように、言葉というものはごく単純なやり取りでも、一皮めくると、誰が、誰に対して、何を言う、というような単純な主客関係では説明しつくせない場合が多いのです。自分で話しているつもりでも、実は他者の言葉を繰り返している。自分で書いているつもりでも読んだばかりの誰かの言葉に反応している。ましてや読むとなれば、まずは相手の言葉の懐に飛び込まないと、批判も批評もおぼつかない。ここに共通してあるのは、徹底的な受動性です。人間が生得的に持っている**受動の技術**。この受動性を上手に身につけた人こそが、言葉を上手に使えるのではないか。

### 「聞く」と受動の技術

このように受動性を「技術」などと称して持ち上げると、よからぬ政治性が隠されているのではないかと疑う人もいるでしょう。今は主体性の時代。自分で判断し、行動することが大事。偉い人の言うことに黙ってついていけばいいわけではないし、そうした態度には権力に迎合する危うさがある、と。

そもそも現代人が得意なのは、自分から「する」ことのはずです。私たちは「やり遂げることは善」という教育を受けて育ってきました。自分の意志で自分をコントロールし、自分がめざした地点まで自分をもっていかねばならない。それだけに、意志の力に頼らずに何事かを成し遂げろと言われても、今一つイメージが湧かない。難しさを感じてしまうのです。

とりわけ言葉の習得ではそう。「他人せ」や「受け身」という言語モデルでは、生徒にやる気があればあるほど、学習のステップが用意しにくい。「よし、やろう」と積極的に事に取りかかりにくいからです。それなら、自分でなんとかできる行為として、「読む」「書く」「話す」などから始めたほうが、やりやすいのではないか。「あなた任せ」の「聞く」は後回しにして、「やろう」と思ったときにできることをやったほうがモチベーションがあがりそうです。

しかし、自分でやれることをやるだけの言語習得は、いずれ壁にぶつかりま

す。どんなに意志の力でがんばったとしても、言葉との取り組みの中で**私たちは必ず受動的になることを余儀なくされます**。この壁を乗り越えなければ、先には進めません。言葉はほんとうに奥深い。「なぜ自分は言葉を使えるのだろうか？」と思わず自問してしまうような不思議な瞬間がある。それは自分の力ではどうにもならないと思えるようなことを、なぜか自分でできてしまう瞬間なのです。主体的なのに受動的でもあるようなそんな瞬間を、母語以外の言語でも実現させるためには、自分の中にすでに埋め込まれている「受動の技術」を磨く必要がある。

それを助けるのが「聞く」ことなのです。「聞く」ことを通し、言葉のもっている奥深い部分に到達することができます。真の意味での上達は、この「奥深い部分」への接近なしには実現されません。自分でできることをやるのは大事だし、そうやってモチベーションを高めることには意味がありますが、いずれはぶつかる壁を越えるためには、「聞く」を通した「受動の技術」の鍛錬が必要なのです。

## 言葉が「うまい」とは？

この壁を痛感させるのは、とりわけ「うまさ」が問題になるときです。私たちはしばしば言語運用ができるかどうかだけではなく、そのレベルを話題にします。「あの人はレベルが高い」「たどたどしい」と言ったふうに誰もが運用力に敏感に反応します。それを可視化するためのテストも古くから行われてきました。

とりわけ「話す」ことについては、日本では「英語ぺらぺら」といった言い方がよく使われます。この言い方には、私たちが英語の運用に対して持っているイメージが投影されています。よどみなく、流麗に、そして苦もなくその言語をしゃべることが言葉のうまさだという先入観が、「ぺらぺら」には込められているのです。

CEFR(欧州共通参照枠)という欧州で使われている参照枠でも、上級レベルに

なると「話す」ことについては *effortlessly* とか *fluently* といった用語が使われ、私たちが言語に対して持っているイメージを補強してくれます。よどみなくぺらぺらとしゃべるのは、「良きこと」のようなのです。

おもしろいのは、日本語で話すときはこうした「ぺらぺら信仰」があまりかかわらなくて、むしろ木訥としたしゃべり方のほうが信頼を得る場合があるということですが、ここではそのことはいったん脇においておきましょう。どうやら英語をはじめとしたヨーロッパの言語では、よどみなさが評価されるらしいのです。

そこであらためて考えてみましょう。「よどみなさ」が言語運用の上達や洗練とむすびつけられるのは、いったいなぜなのでしょう。日本語の例を合わせて考えればわかるように、必ずしも「よどみなさ」は絶対的な評価基準ではありません。にもかかわらず、「よどみなさ」が評価されることは多い。

これは、英語などのヨーロッパ語では、よどみなくしゃべるほうが自然に感じられるからかもしれません。日本語ではよどみなくしゃべることが、必ずしも自然ではない。むしろ不自然に聞こえることさえあります。ところが、英語などを母語とする人はよどみなくしゃべることが多い。あらためて言うとかえっておかしくも聞こえるのですが、英語話者の多くはだいたい流麗にしゃべりたいということなのです。

何だ当たり前のことじゃないか、という人もいるかもしれません。しかし、果たしてそうでしょうか。よどみなくしゃべるのは決して当たり前のことではありません。現に、英語が母国語ではなく、その使用に慣れていない人には、流麗にしゃべるのは決して簡単なことではありません。にもかかわらずそれが「当たり前」とされているとするなら、それは、よどみなくしゃべることが社会的な要請としてある、そのために人々はそうするように訓練されている、そしてそこから逸脱すると「不自然」とか「逸脱的」という烙印をおされてしまう、というふうを考えるべきではないでしょうか。

ではなぜ、英語などの言語ではよどみなくしゃべることが「自然」なこととして、社会的に半ば強制されるのでしょうか。なぜ「よどみなくしゃべるべきだ」

という拘束が話者に対して働くのか。ここからが大事なところです。

## 言語の心地良さ

ここで一步踏みこんでみましょう。私が指摘したいのは、よどみなくしゃべるほうが、聞いている方にとって「心地良い」のではないか、ということです。だから、よどみなさは強制されてきたのではないか。

誤解しないでいただきたいのですが、「心地良い」は審美的な判断ではありません。言葉の運用で「心地良さ」が重要なのは、それが以下のような要素と結びつくからです。

- 1) わかりやすい。内容が頭に入りやすい。
- 2) ストレスがない。親密で拒絶反応を引き起こしにくい。
- 3) 話し手について好印象を与える。その知性や社会的地位、人格的な円満さを示唆する。
- 4) 聞いているほうが、生理的な快感を得る。よい気分になる。

こうした要素はいずれも言語によるコミュニケーションを円滑にする大事なもののばかり。「よどみなさ」には合理性があると言いたくなるでしょう。たしかにここには一定の意味があると私も思います。ただ、「よどみなさ」は、話す側（そして書く側）だけで実現される価値ではないということも忘れてはいけません。つまり、受け手にあたる「聞く」側や「読む」側にも、「よどみなさ」を受容する力がなければ、「よどみなさ」はその本来の役割を果たせないのです。

ここで英語学習の話に戻しましょう。なぜなら、ここがまさに日本語話者にとっての悲劇と喜劇の始まりだったからです。私たちは英語で称揚される「よどみなさ」の価値を「話す」ことばかりに見てきた。「ぺらぺらの話し手」ばかりを理想化してきた。しかし、自然によどみなくしゃべることの効用が生か



されるのにほんとうに大事なのは、「よどみなさ」の価値を生かす聞き手になることなのです。いずれ自身が話者としてよどみなく英語を話すのだとしても、その効用を自分で聞き手として体験している必要がある。よどみなくしゃべる人の言葉を「わかりやすい」「親しみがわく」と感じたり、それを快感だと感じることを経験として知ってはじめて、人は「よどみなさのコミュニティ」の一員となることができるからです。

ところが日本の「英語ぺらぺら信仰」では、よどみなく話される英語の本来の効用には目が向けられず、「ネイティブ・スピーカーの流暢な英語はスピードが速いからたいへんだ。負けずにがんばろう」といったポイントばかりが強調される。こうなると、よどみない英語が「心地良さ」どころか苦難と苦痛の種となっていることがわかるでしょう。だから学習者の努力も、この苦難をどうやって乗り越えるか、という方向に向けられてしまいます。よどみない英語の本来の効用を意識するよりも、上っ面のスピード感ばかりに注意がいき、肝心の「わかりやすさ」や「親しみ」といった要素は考慮されなくなってしまいます。そのため、よどみなさを通していったい何をしたいのかが意識されないまま、ただスピードアップにこだわるという、ゆがんだ言語観がいきわたることになります。

「よどみなさ」や「自然さ」に意味があるとするなら、それは「心地良さ」や「わかりやすさ」の創出のためだということであらためて確認しましょう。それが何よりの効果。ならば、私たちがまず学ぶべきは「よどみなさ」のもつ「心地良さ」や「わかりやすさ」をとらえられる力と感受性ではないでしょうか。そこを鍛えなければ、何をめざして英語学習を行うかが一向に見えてこない。ネイティブ・スピーカーのふりをして高速英語をしゃべるのは決して最終到達点ではないのです。

こうした能力を鍛えるのにもっとも大事なのは、音声との接触です。もちろん読解を通してそれを感じ取ることも可能。作文の練習の中で、それを鍛えることもできるでしょう。自分で声に出して、言葉の「心地良さ」を知ることもある。しかし、「心地良さ」という言い方にすでに含意されているよう

に、「心地良さ」とは本来、受動的なものです。言葉の運動に身を任せ、脱力し、楽になる。これを知ることこそが、言葉の深みへの第一歩となるのです。次の章ではそのあたりを考えてみましょう。

#### **[第1章のポイント]**

- ・四技能は等価ではない。「聞く」ことの特異性
- ・受動性を鍛えるために
- ・言葉の「うまさ」とは？
- ・言葉が「心地良い」のはどんなときか？